

■防衛医科大学校 松尾洋

孝講師と中山喜医官らは血液中に尿酸が増えて関節が痛む痛風の発症に関連する遺伝子を特定した。痛風の患者と健康な人で遺伝子配列を比べると、5つの遺伝子に差があった。発症のリスクが分かれば、痛風を予防したり、新しい治療法を開発したりするのに役立つ。

患者945人と健康な1213人の遺伝子を解析し、発症に関わりそうな遺伝子を約2千個に絞り込んだ。患者1

痛風関連遺伝子 新たに5つ特定

396人と健康な1268人でさらに詳しく調べ、発症に関わる5つの遺伝子を突き止めた。腎臓で尿酸を輸送する働きがある「NPT1」や「URAT1」などの遺伝子を含んでいた。

発症関連遺伝子はすでに5つが見つかっており、今回の成果で合計10個になった。ほかにも関連する遺伝子があるのとみて、解析を進める。国立遺伝学研究所や理化学研究所などと共同の研究成果で、英医学誌で発表した。